
【中国・神話伝】

すかい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

【中国・神話伝】

【ノード】

N7382B

【作者名】
すかい

【あらすじ】

太古の昔に存在した、偉大な神の力。時を越えて、その力は一人の青年に託される。全てはある戦を防ぐために。しかし、その使命を全うする時は・・・青年の命はない。

～序 章～（前書き）

中華ファンタジー小説です。かなり長編ものです。（いつ完結するか予測不可能なくらいです。）

（序章）

時は昔・・・遙か何千年前の中国。

そこはまだ文明開化を遂げておらず、中国全土の支配権を巡る争いもない、平穏の世であった。

また、“神”と“人”が限りなく密着している世でもあった。

神は絶えず人々の前に現れ、万物を築くために必要な要素を与えていく。

そして人々は、神々に与えられた“恩恵”に絶えず感謝の意を込め、神々を深く尊び慕っていた。

こうして、“神”と“人”の間では調和の取れた生活を送っていたのだった。

しかし、そんな穏やかな日々はあることごとく簡単に崩れ去つていった・・・・・

その発端となつたのは、ある一つの“欲”。

人々の間で権力に執着する者がいるように、神々の間でも権力に執着する者が、続々と現れ始めたのだった。

己の持つ超越した力に慢心した神々は、全ての万物を我が物にしようと所々で戦をし始めていく。

次第に、その戦は下界にも影響し始め、ついには天と地を巻き込む大きな戦と化してしまったのだった。

天界はもちろん、下界に住む人々は神の戦に巻き込まれ大きな痛手を受けていく。

時は紀元前。

中国の黄河流域に都市国家が発達し、国家を統一する王朝が続々と現れていく時代。

そこでは前進し続ける文明発達により、平民の間でも富を得る者が続々と出現していった。

中でも、長安にある“蓮家”は中国全土でも群を抜く富を誇り、人々の間では王朝の財を超えると囁かれる程の財閥を所有していたのだった。

穏やかな風が辺りを包み込み、一面に広がる草原が心地良い音をたてながらざわめいている。

そこでは、騒々しい町の声は一切届かず、ただ静かな時間が流れていた。

そんな中、広い草原に一人の青年が寝そべり、青々とした空と同じ色の目で、白い雲を見上げていたのだった。

「・・・もうこんな時間か・・・。」

遠く彼方を見つめていた青年は、ポケットにしまっていた懐中時計を取り出すと、思いの他時が経つていたことに溜息を吐く。

やがて懐中時計をポケットにしまい込むと、寝そべった体をゆっくりと起っこし、一度畠の溜息を吐いたのだった。

草原を撫でる風は絶えず吹き続け、青年の髪もその風に踊らされてい。

そんな風に身を包まれる中、青年は再び広い空を見上げた。

しかし、再び空を見つめる青年は、どこか陰が架かったような浮かないものがあり、何か探るような視線を青い空に向けた。

（なんだ・・・今朝から何か胸騒ぎがする。）

青年は畠を細めながら、心の中でそう呟く。

そして、小さく脈打つ胸を軽く掴みながら、青年は眉をひそめた。

その時、青年の背後から何やら慌しい複数の足音が響いてきた。
「李周様！こんな所にいらっしゃったのですか！？」もうすぐお客様がお見えです！すぐに接待の用意を！――」

複数の足音の主達は李周の横に辿り着くと、額に汗を流しながら膝を付き、声を張り上げた。

「・・・ひめわこ。耳元で騒ぐな。」

李周はわめく者達にうなづきながら、重々しく立ち上がる。

「いいですか！李周様は“蓮家”の御子息。こんな所で油を売つている場合ではないのですよ！――」

複数の者の中でも一段と声を張り上げている男は、李周の衣服を正しながら田の前で叫んだ。

「耳元で騒ぐな。」

キンと鳴り響いた耳に手を充て、李周は肩を落としながら歩き出をうとした時だった。

今まで穏やかだった風は、突然嵐のよつた強風に変わり、草原の中で一気に吹き荒れた。

しかし、それは一瞬の出来事で、気付いた時にはまた元の穏やかな風に戻つていったのだった。

(・・・・な・・に・・・・?)

不意に起つた不可思議な突風に、李周は呆然と立ちつくす。

「李周様どうなさいましたか?」

駆け寄つてきた者達はと云つと、何事もなかつたような顔で立ちつくす李周に田を向けた。

「・・・いや、・・・何でもない。」

呆然と立ち尽くしていた李周は、我に返ると疑問の眼差しで青い空を一瞥したのだった。

辺りは何も変わらない先程と同じような光景。

しかし、今の風で何かが変わった気がした。

けど、それが何なのか、何に違和感を感じたのかは分らない。。。

それでも、何かに自分の心は反応している。

そう・・・。そんな不可解な出来事が・・・。

全ての始まりだった。

第2話・青い戒め

静寂な時が流れる穏やかな空間。

そこには所々に飾られている様々な色をした宝玉が、神秘的な光を放ちながら、薄暗い室内を照らし出す。

辺りは何の音もなく、まるで時が止まったような落ち着いた空気を漂わせている。

その空間の中で、足元まで届く長い髪の女が、広い室内の中心部にポツンと佇んでいた。

すると、薄暗い部屋から突然小さな竜巻が湧き起ると、渦巻く風の中から一人の男が現れたのだった。

「 匡士様、お呼びでしょうか。」

風の中から現れた男は、紫色の長い髪を垂れ流し、室内の中心部に佇む匡士の前でひざま付いた。

「 劉周公か。・・・おまえをここへ呼び出したといふことは、・・・分つてゐるな?」

匡士は劉周公の方へ首を傾けると、小さく笑みを浮かべる。

「 はい。そろそろ時期が来たと言つことですね。」

目線を床へ落としていた劉周公は、小さく息を吸い込むと、視線を匡士の方へ向けた。

「 そうだ。・・・あれを創り出してから約200年。奴ももう立派な青年に成長しているだろ? 連れ戻すのは今しかない。」

匡士は全身を覆いがふさるマントを翻すと、劉周公の目を射抜くよう見つめる。

「御意。」

その眼差しに答えるように、劉周公は顎を軽く下げる、再び小さな竜巻が室内で湧き起こり、一瞬の内に姿を消し去つていつたのだった。

町人や商人によつて活氣溢れる長安。

王朝付近といふこともあり、そこでは人口が集中していた。

また、路地に立ち並ぶ建物は、きらびやかに飾る豪華なモノが目立ち、大富豪の集う町として、長安の象徴にもなつてゐる。

その中で、一際敷地面積が広く、巨大な城壁が囲う中、誰もが圧倒されるような豪華絢爛な城が、長安の中心部にそびえ立つてゐた。

それは中国の中でも一番の財力を誇る、 “蓮家” の本家である。

蓮家の一室にある巨大なロビー。

室内はまるでダンスホールのような広さを持ち、天井には余すところなく細かな彫刻が彫られ、壁には高さ5mはある窓ガラスが張り巡らせていた。

そんな広いロビーの中では、漆黒の長い髪をした女が、落ち着かない様子で辺りをうろついている。

その時、ロビーの入口にある巨大な扉が重々しい音を立てながら、ゆっくりと開いたのだった。

「李周、遅いですよ！どこへ行つてたのですか！？」

女は扉の開く音に敏感に反応すると、ロビーの中へ入つてきた李周の元へ、駆け足で向かつて行つた。

「少し風に当たつてただけだ。・・・つで、今日は一体何の接待だ？」

李周はポケットに手を突つ込むと、氣だるそうな様子で肩をすくめ

る。

「今日は淵家の皆様とのお茶会よ。」

「お茶会…？」

あからさまに嫌々な声で吐き捨てながら叫び、苦虫を噛み潰した
よつこ顔をしかめる。

「どうりで親父がいないわけだな。」

そして深く溜息を吐くと、しかめ面のまま首を横へ傾けた。

「このお茶会も蓮家の繁栄維持に欠かせないものですよ。蓮家を支
援する者達の交流は必要不可欠だわ。・・・それに、今後この家の
跡取りについても重要なことになりますし・・・。」

母親は少し声を張り上げると、戒めるよつこよつこ声である。

「こ家の跡取りに関しては問題ないだろ。俺はこの家を継ぐつも
りだ。」

その時、母親の表情が一瞬だが陰の架かつたものへと変わった。

そして、どこか無理に繕つてこよつこな笑顔で一言返したのだ
った。

その様子を横目で捕らえた李周は、ただ閉口するしかなかつた。

明らかに何かを隠している素振り。

母親は嘘をつくのが苦手な為、いつも隠し事をする時は先程のよ
うな無理な笑顔を作る。

それはよっぽど鈍い者でない限り、誰にでも分るよつなものだった。

。そんな素直な母親だが、時にはその素直さが残酷なものになる。・・・

過去に、李周は自分の田の色について母親に尋ねたことがあった。

どうして自分は他の者と田の色が違うのか、なぜ畠と同じじゃないのかと。

物心が付いてから、その疑問はどんどん膨れ上がつていった。

しかし母親は何も答えず、あの無理な笑顔ではぐらかされてしまった。

そんな母親の様子を見て、李周は幼いながら、その事には触れてはいけないモノだと確信したのだった。

東洋人には有り得ない青い田。

もちろん、先祖を辿つても外国人の血筋はどこにも存在しない。

自分が人とは違う田の色をしている。

このことは、どんなに考えたって決して良いことではない。また、初対面の者には必ずと言つていい程、この田の色に不審感を抱かれている。

その度に李周は、この田の色の意味を探り続けた。
しかし、どんなに書物をあわしても、その答えは見出せないところ。

そして、自分が跡を繼ぐのに母親が心から喜ばないこと。

少なくとも、この田の色が関係しているのだと李周は確信していた。
しかしそれを母親に尋ねるわけにもいかず、そのことは一つのわだかまりとして、抱え続けている。

ロビーを出て長い通路を歩く李周。

ふと、通路の窓ガラスに映る自分の顔に田を向けた。

窓ガラスには普段と変わらない無愛想な顔がハツキリと見える。
そして、この青い田も。

李周は窓ガラスに手を充てると、きつく拳を握った。

（人にどう見られているとか、そんな事はどうでもいい。・・・た
だ、周りと同じように生活しているのなら、何故この目は他と同じ
ようにならないんだ・・・。）

窓ガラスに映る忌々しい青い目を、李周は射抜くように睨みつける
と、思わず小声で呟く。

「・・・俺は、一体何なんだ・・・。」

その時だった。

突然、外庭の方から大きな爆音が鳴り響いてきた。

視界を遮るような土煙。

周囲の物は無残に砕け散っていた。

その場にいた人だかりは、悲鳴を上げながら四方八方へ散らばつていいく。

李周は駆け足で爆音のした方へ向かつた。

辺りは舞い上がる土煙で何も見えない。

すると、どこからか得体の知れないおぞましいうなり声が聞こえてきた。

「なんだ！？」

うなり声の主を探す為に四方へ視線を動かす李周。

その時、土煙の中から体長3mはある巨大な猛獣が、李周目掛けて飛び込んで来た。

それを間一髪でかわした李周は、襲い掛かつてきの猛獣に目を向ける。

「！？」

土煙が次第に晴れていき、ようやく周囲の状況がはっきりした時、爆音をならした巨大な猛獣の姿が明確に分つた。

李周に襲い掛かつてきの巨大な猛獣は、恐ろしい程ギラギラと光る目をしており、まるで口裂け女のような反三田田形の口からは、長さ1mはある歯が剥き出しになつていて、頭には鬼のような太い角が生え、背中にはコウモリのような黒い羽が羽ばたいていた。

明らかにこの世の者とは思えない生物。

側にいた警備兵達は、何とか猛獸に立ち向かおうとするが、恐ろしいその姿に頭足がすくんでいる。

猛獸は、獲物の捕獲に失敗したことに腹を立て、地面の上で前足を蹴ると、空気が振動するような雄たけびを上げた。

「すぐに役所に連絡しろー後はまだこの状況を知らない奴らに、早く知らせるんだ！！」

李周は佇んでいる警備兵に向かって、声を張り上げた。

李周の張り上げた声に、ようやく我に返った警備兵達は、李周の指示通り周囲の者を避難させる為、四方へ駆け出していく。

「李周様も早くお逃げになつてくださいーーー」これは我々が・・・・

その時、風を切るような音が響いた瞬間、李周の目の前にいた警備兵達の背中から、勢い良く血が噴出すると、呻き声を出わずには、地面へ倒れこんでしまった。

目を見開く李周。

その視線の先には、血で真っ赤に染まつた爪を舐める、猛獸の姿があつた。

「貴様・・・・」

その姿を見て歯を食いしばり、強く拳を握る。

しばらくにらみ合つ李周と猛獸。

猛獸は次こそは獲物を為損じないよう、目を細めて李周の隙を狙う。李周も猛獸の動きを見張っていた時だった

突然、心臓が大きく脈打つた。

瞬間、全身から何かは分らない、とてつもない力が駆け巡つてくる。

李周は足元に転がっていた、警備兵の刀を握り締めると、駆け巡る衝動に身を任せ、力いっぱい地面を蹴り上げた。

頭上高く飛び上がつた李周は、猛獸の脳天目掛けて刀を突き立てる。そして、猛獸がそれをかわすよりも早く、突き立てた刀は凄まじい勢いで、猛獸の頭に突き刺さつたのだった。

それはあつという間の出来事だった。

頭に刀を突き刺された猛獸は、石のように硬直すると、うめき声を上げ、空中へと分散していく。

暫く静かな時が流れた。

李周は猛獸に突き立てた刀を握ったまま、その場で立ち尽くす。

（なんだ・・・猛獸を見た途端、いきなり血が騒ぎ出した。）
握り締めている刀に目を向ける李周。

そこには、くつきりと猛獸の血が付着している。

（刀も使い慣れているわけじゃない。・・・けど、体が勝手に動き出した・・・まるで、戦い方を始めから知っているみたいだ。）

その時、静寂だつた空気が一瞬揺らめくと、李周の目の前で黒い渦が沸き起こった。

「今度は何だ！？」

暫く微動だにしなかった李周は、第一の異変に目を見張る。
湧き起こった黒い渦は次第に膨れ上がり、人型へと形成していった

のだった。

瞬間、李周は黒い渦から、ただならぬ気配を感じとった。

先程の猛獸にも今までにない気配を漂わせていたが、この黒い渦から感じるものは、それと比べ物にならなくくらいおぞましく思えた。

すると黒い渦から、漆黒の髪をした男の姿が現れたのだった。

「見事な腕前だな。」

黒い渦から現れた男はそつ然と、怪しい光を帯びた目を李周の方へ向ける。

「流石、奴の血を引く者というだけあるな。・・・もし、完璧な姿になつたら、さぞかし恐ろしい存在となるだろうな。」

そして、薄情そうな口元を歪ませると、冷たい眼差しで李周の青い目を見据えた。

「やつの血を引くものだと? どういって? 」

男の言ったことに、引っかかるものを感じた李周は、思わず身を乗り出す。

「おまえは一体誰だ!俺の何を知つていい!?」

次第に声を張り上げ、男に問い合わせていくが、男は何も答えず只あざ笑うだけだった。

「悪いが全てを知る前に、お前には人間である内に、やつをと消えてもらつ。」

瞬間、男は李周に向かつて人差し指を向けるや否や、李周の足元周辺から赤い光が輝きだした。

そして、李周の全身を取り巻く様に、赤い光は筒状の形を形成していく。

その時、まるで喉を締め付けられるような息苦しさを感じた。

「な・・ん・・・だ・・」

息苦しさは次第に増していく、呼吸困難に陥つてくる。

李周は体を崩し、思わず地面に手を付いた。

「今は人間である以上なにもできないだらう。・・・憎き奴の力。じわじわとなぶり殺してやる。」

男は苦しむ李周の元へゆづくつと近寄ると、立ち止だかるようにして李周を見下ろした。

李周を包む赤い光に照らされ、男の顔はより一層はつきりと見える。李周は苦しみながらも、男の方へ視線を向けた。

ふと、男の顔を田で捕らえた瞬間、李周の脳裏からはある記憶が蘇つてきたのだった。

「・・・おまえは、あの時の・・・」

苦しそうに耐えながら、李周はかすれた声で呟く。

「ほお・・・。私を覚えていたか。」

男は冷笑を浴びると、李周の田の前で片膝をつき、親指で顎を自分の方に向けさせた。

「私はあの時おまえに言つたはずだ。」ことなる」とを。・・・忘れてはいないだらうな。」

そして、李周の顎をおさえている指を離し、今度は喉へと爪を突き立てる。

突き立てた鋭利な爪は李周の喉に食い込み、そこからは鮮やかな血が流れ出す。

「・・・貴・・・様・・・」

だんだんと視界がくらみ、意識がもひきのひし始めてきた李周。

自分の体を支える」とに限界を感じた時だった。

突然、突風が吹き荒れた瞬間、李周を囮んでいた光のベルは、皿が割れるような甲高い音を響かせながら、あつという間に砕け散つていった。

「・・・これは。」

不意のことにも男は一瞬肝を抜かすが、すぐに冷静を取り戻すと、視線を上空へと向けた。

「来たか。天界の奴ら共。」

その時、真っ青な空から4つの眩い光が輝きだすと、地上に向かって一直線に光の塊が舞い降りて来る。

そして、地上に着地した光の塊は空気中で分散すると、中から4人の青年が現れたのだった。

その中には劉周公の姿がある。

他の3人も劉周公と同様に、どれも皆変わった髪と目の色をしていた。

劉周公達は男の前で、対峙するように立ちはだかる。

男は意味ありげな微笑で、劉周公達の方へ一歩前進した。

「俺らの切り札をそう安々と殺させはしねえんだよーー！」

3人の先頭に立つ劉周公は、男に向かって吐き捨てるように怒鳴る。

「何ならこの場でやり合つ？本気の勝負なら受けてたつよ。」

劉周公の背後にいた緑色の髪の男は、小さく握り拳を作ると、構えの姿勢で男と向き合つ。

それを見た男は鼻で笑うと、足元まで屈く上着を翻し、劉周公達から体を反らした。

「今はおまえらと遊んでいる暇はない。奴の力を覚醒させたいのなら・・・好きにするがいい。・・・だが、これだけは覚えておけ。ことは既に動き出したとな。」

そう告げると、軽く地面を蹴り上げ、上空へ舞い上がり、地上にいる劉周公達を見下ろした。

そして、一瞬のうちに男は姿を消していったのだった。

男の姿が消えてもなお、上空を見上げる劉周公達。

しばらくの間、沈黙が流れた。

劉周公達が妨害してくれたお陰で、ようやく体が自由になつた李周は、ゆっくりと立ち上ると、劉周公達の側へ歩み寄つた。

「今度は何だ。あいつと同じような類か？」

李周は劉周公達と向かい合つようにして、4人を見据える。

「てめえ！人間が折角助けてやつたのに、あいつと同等扱いするんじゃない！」

李周の言つたことがよっぽどカンに障つたのか、劉周公は前のめりになり、思い切り怒鳴り散らした。

「まあまあ、落ち着きなよ。確かに性質は似たようなものじゃん。」
その横で、金髪を一つに結つた男が仲介する。

「ともかく、私達は美形なあなたを連れ戻しに来たのよ。」

荒れている劉周公をよそに、金髪の男の隣にいる、赤色の髪をした女は、李周に向かつて熱い視線を送つた。

「・・・連れ戻す？どうじうことだ。」

李周は、度重なる不可解な事に眉をひそめる。

氣を取り直した劉周公は、咳払いを一つすると、李周の方へ人差し指を向けた。

そして、声を張り上げて宣告したのだった。

「天界が創り出したもの、『青龍星君』の血を引くお前を迎えて来たんだ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7382b/>

【中国・神話伝】

2010年12月16日02時50分発行